

## 承応期造営相国寺三重塔の復元研究

### Keywords

相国寺 建地割図 足利家  
塔 禅宗寺院 承応期

### 1. はじめに

#### 1.1 研究背景と目的

日本では推古天皇五年(597)に飛鳥寺の塔が完成して以来、全国各地に多くの塔が建てられた。

臨済宗寺院である相国寺には鹿苑院三重塔、足利義満七重大塔、後水尾天皇三重塔が建っていたとされ、天龍寺蔵の相国寺三重塔建地割図が残っている。また、洛中洛外図も相国寺の七重塔から描いた図だとされており、相国寺においては塔と寺院が密接であったため、多くの研究がなされている。

本研究では、相国寺三重塔建地割図を基に三次元CADで復元を行い、大工集団である建仁寺流と四天王寺流の建造物と比較分析すること、また相国寺において塔が建った理由を明確にすることを目的とする。

#### 1.2 研究方法

- (1) 相国寺・後水尾天皇三重塔に関する基本史資料を収集する。
- (2) 相国寺大塔建地割図を分析する。
- (3) 京都に現存する三重塔・五重塔の実地調査結果を分析する。
- (4) 古文書や既往研究を基に相国寺において塔が建った理由を明確にする。
- (5) 四天王寺流を代表する平内家の木割書『匠明』(塔記集)と建仁寺流を代表する甲良家の木割書『建仁寺派家伝書』に基づき、三重塔の基本設計を行う。
- (6) 建地割図をもとに復元図面を作成。
- (7) 5の図面をもとに、CADで三次元復元を行う。
- (8) 建仁寺流、四天王寺流の建築と相国寺大塔の比較・分析を行う。

### 2. 相国寺について

#### 2.1 概要

正式名称：萬年山相国承天禪寺  
宗派：臨済宗相国寺派

所在地：京都市上京区今出川通烏丸東入

相国寺は臨済宗相国寺派の大本山であり、京五山の第二位に位置した名刹として有名である。室町三代將軍の足利義満が永徳二年(1382)に室町幕府東側の地に創建し、故・夢窓疎石を開祖とし、春屋妙葩を二世住持とする。鹿苑寺金閣や慈照寺銀閣は相国寺の末寺にあたる。

境内は排門・総門・山門・仏殿・土地堂・祖師堂・法堂・庫院・僧堂・方丈・浴室・東司・講堂・鐘楼などの諸堂宇が整う寺観を呈しており、応永六年(1399)にはおそらく史上最も高い木造塔とされる七重大塔が建立された。

応永元年(1394)九月に直歳寮から出火して全焼したのをはじめに天文二十年(1551)七月十四日の兵火による焼失まで幾度の焼失と再建を繰り返した歴史を持っている。

#### 2.2 相国寺と塔

表 1 相国寺における塔の歴史年表

| 元号     | 西暦   | できごと                                                   |
|--------|------|--------------------------------------------------------|
| 明德四年   | 1393 | 相国寺七重大塔の建設がはじまる                                        |
| 応永六年   | 1399 | 相国寺の七重大塔が完成する                                          |
| 応永十年   | 1403 | 高さ100メートル余りの相国寺の七重大塔、落雷により炎上、焼失する                      |
| 応永二十三年 | 1416 | 北山第に造営中の相国寺七重大塔、落雷により炎上、焼失する。相国寺内に移転再建が計画              |
| 長祿三年   | 1459 | 義政、相国寺塔婆造立を命ず                                          |
| 応仁元年   | 1467 | 応仁の乱により、相国寺の東司や総門など、兵火にあい焼失する。金閣などを残して鹿苑寺も焼失する。大塔のみ残る。 |
| 文明二年   | 1470 | 相国寺大塔、落雷により炎上する                                        |
| 承応二年   | 1653 | 後水尾天皇は三層の宝塔(三重塔)を再建                                    |
| 天明八年   | 1788 | 三重塔が焼失                                                 |

相国寺には焼失した塔が三基あったとされる。鹿苑院三重塔は康暦二年(1380)創建、文正元年(1466)焼失(焼失は1467年という記述もあり)、足利義満七重塔は応永六年(1399)足利義満建立、再建された三代目の塔が文明二年(1470)落雷によって焼失、高さが360尺(約109m)あったと伝える。後水尾天皇三重塔は承応二年(1653)後水尾天皇によって建立、天明八年(1788)焼失している。次項で示す建地割図は後水尾天皇三重塔だとされる。



K08080 内藤 香

### 2.3 相国寺が塔にこだわった理由

相国寺は足利家の菩提寺であると同時に、幕府の公的な宗教行事を行う大道場としての性格、夢想派の拠点としての性格をもっていた。

相国寺の塔は同時代に建てられた他の寺院の塔の例にもれず、政治的な意味で建てられたと推測できる。その中で、相国寺においては寺院の三つの性格を他に示すために、また義満による顕密仏教の権威を示すために、塔にこだわり、焼失してはまた再建されるという歴史を繰り返したと考えられる。

権威の象徴であった相国寺の塔は日本で一番になる必要があったのである。

### 2.4 伽藍における塔

天明年間(1781~1788)に刊行された「都名所圖會」から現在の後水尾帝歯髪塚か経蔵の位置に三重塔が建っていたことが確認できる。臨済宗寺院の塔は後方又は脇の小高い所に建てるため、相国寺はこれに当てはまらず、密教寺院や日蓮宗寺院の伽藍配置に近く、塔の地位が高い配置である。これは2.3で述べたように、相国寺の塔は政治的な意味で建てられているので、足利義満が塔を重要視していたからだと考えられる。

しかし、禅宗の遺構において、本堂の左に建つ塔が五基、本堂の右手に建つ塔が一基あったことがわかっており、相国寺の塔だけが特に珍しい伽藍配置をしているわけではないということがわかった。

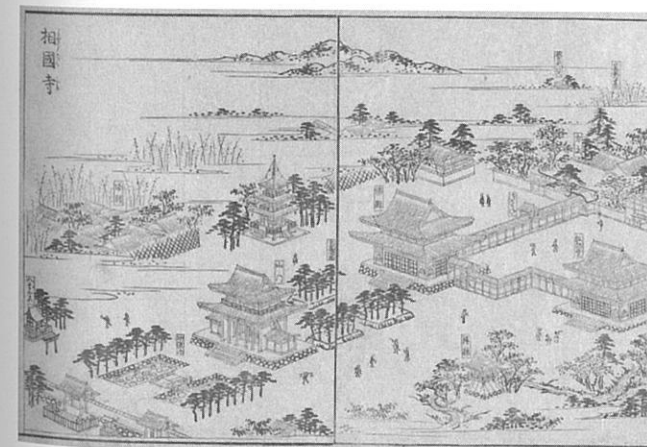


図1 「都名所圖會」巻一 相国寺

### 2.5 相国寺三重塔建地割図

建地割図から相国寺三重塔は禅宗の建築物ながら、尾垂木や肘木の形、支輪の種類が和様であることがわかった。これは塔が伝統性の高い建物であるからである。

また浜島正士氏の論文『塔の柱間寸法と支割について』を

基に分析を行った。三重塔で枝割の制がほぼ完備するのは明通寺塔(文永七年(1270)・福井)が最初であり、室町時代中期以降の塔では同一の一枝寸法で各重を統一した完全な枝割の方式が一般化している。相国寺三重塔は初重総間を1丈5尺の完数とし、二重・三重とも中の間で2枝、脇間で2枝、計6枝落ちとしている。この枝数と一致する層塔の一覧を表2に示す。この中で特に、西国寺三重塔は初重総間が14.965尺なので、ほとんど同じプロポーションだと考えられるが、西国寺の場合は一枝寸法が各重増減しているため、ここに相国寺との違いがみられる。

丸桁の出については各重でそれぞれ6.5枝をとり、統一されている。

表 2 相国寺三重塔と同じ枝数の塔

|          |     |                         |
|----------|-----|-------------------------|
| 枝数が一致    | 三重塔 | 西国寺三重塔(永享元年(1429)・広島)   |
|          |     | 向上寺三重塔(永享四年(1432)・広島)   |
|          |     | 八幡神社三重塔(文正元年(1466)・兵庫)  |
| 枝数・寸法が一致 | 五重塔 | 妙成寺五重塔(元和四年(1618)・石川)   |
|          |     | 東照宮五重塔(文政元年(1788)・栃木)   |
|          |     | 厳島神社五重塔(応永十四年(1407)・広島) |

### 3. 実地調査分析

#### 3.1 調査内容

2011年10月11日から2011年10月14日、京都に現存する塔の形態を把握し、他の建築種別との細部意匠の違いを比較するために調査を行った。対象とする建築は以下のとおりである。

建仁寺法堂・法観寺八坂の塔・清水寺三重塔・宝積寺三重塔・醍醐寺五重塔・東福寺禅堂・東福寺本堂・教王護国寺五重塔・鹿苑寺金閣・仁和寺五重塔・相国寺鐘楼・相国寺宝塔・真正極楽寺三重塔・金戒光明寺三重塔・慈照寺銀閣・浄瑠璃寺三重塔・浄瑠璃寺九体阿弥陀堂・岩船寺三重塔・海住千寺五重塔

#### 3.2 調査結果

塔は宗派に関係なく、和様を用い、同じような形態を持つものが多いことがわかった。軸部に関しては調査した全ての塔において和様であり(室町時代初期になると禅宗様の影響で頭貫に木鼻をつけたものがでてくる)、細部意匠に関しては組物に木鼻がある(真正極楽寺三重塔、岩船寺三重塔)、

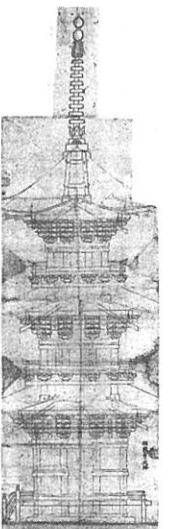


図 2 相国寺三重塔建地割図

和様肘木、禅宗様肘木などの違いがあるものの、斗や尾垂木、支輪などに違いが見られないことがわかった。

しかし、柱間寸法や通減、また高さや相輪の全体に占める割合など、プロポーションに関わることに於いての違いが確認できる。

#### 4. 匠明、建仁寺派家伝書による三重塔の比較

日本の伝統建築における設計の教科書ともいえる『匠明』と『建仁寺派家伝書』の三重塔において、違いはほとんど見られなかった。中央間、脇間共に枝数が同じであり、軒勾配もほとんど変わらないことが分かった。

表3 『匠明』による三重塔の柱間寸法(単位:尺)

| 層 | 総間 |    | 中央間 |    | 脇間  |    | 一 枝<br>寸法 | 通減率    |
|---|----|----|-----|----|-----|----|-----------|--------|
|   | 寸法 | 枝数 | 寸法  | 枝数 | 寸法  | 枝数 |           |        |
| 一 | 16 | 32 | 6   | 12 | 5   | 10 | 0.5       | 1.0    |
| 二 | 14 | 28 | 5   | 10 | 4.5 | 9  | 0.5       | 0.875  |
| 三 | 11 | 22 | 4   | 8  | 3.5 | 7  | 0.5       | 0.6875 |

表4 『建仁寺派家伝書』による三重塔の柱間寸法(単位:尺)

| 層 | 総間 |    | 中央間 |    | 脇間  |    | 一 枝<br>寸法 | 通減率    |
|---|----|----|-----|----|-----|----|-----------|--------|
|   | 寸法 | 枝数 | 寸法  | 枝数 | 寸法  | 枝数 |           |        |
| 一 | 16 | 32 | 6   | 12 | 5   | 10 | 0.5       | 1.0    |
| 二 | 14 | 28 | 5   | 10 | 4.5 | 9  | 0.5       | 0.875  |
| 三 | 11 | 22 | 4   | 8  | 3.5 | 7  | 0.5       | 0.6875 |

表5 『匠明』による三重塔の軒勾配(単位:寸勾配)

| 層 | 屋根  | 地垂木 | 飛檐垂木 |
|---|-----|-----|------|
| 一 | 4.3 | 1.9 | 3.2  |
| 二 | 4.5 | 2.1 | 3.5  |
| 三 | 7.7 | 2.7 | 4.3  |

表6 『建仁寺派家伝書』による三重塔の軒勾配

| 層 | 屋根     | 地垂木 | 飛檐垂木 |
|---|--------|-----|------|
| 一 | 4.3    | 2.3 | 3.5  |
| 二 | 4.5    | 2.5 | 3.8  |
| 三 | 7.5又は8 | 2.8 | 4.3  |

(単位:寸勾配)

#### 5. 相国寺後水尾天皇三重塔

##### 5.1 三重塔復元のための検証

##### (1) 軒反りにについて

軒反りの決定に関して、塔の見え方というのは非常に重要な要素である。相国寺については2.4で論じたとおり、軸線上にある法堂の左側に建っており、塔を下から見上げるというよりは、京都全域の遠くから眺めるという見方をしたであろう。

実際の軒反りの決定に関しては『「CAD軒反り式」からみた文化財社寺軒反り曲線の特性』を用い、

$$h/L=0.07, \theta=45$$

(L:反り元から反り先端までの水平距離、  
h:反り元から反り先端までの垂直距離)  
( $\theta$ :軒反り曲線の撓みの大小)

とした。

##### (2) 絵図分析

都名所図絵から、三重塔は四面に登高欄があり、正面性のない建物であることがわかる。三重塔では元来、柱間装置は四面同じであるべきであり、そうでないものは近世的傾向を示しているといえるため、この点において相国寺は中世的傾向をもつといえる。また、近畿地方の仏塔は全十五基うち九塔が四面とも同じ柱間装置を用い、中央間板扉または棧唐戸、脇間連子窓としており、相国寺は図3・4から相国寺三重塔の柱間装置には中央間板扉、脇間連子窓が用いられていたと推測できる。

##### 5.2 三次元復元

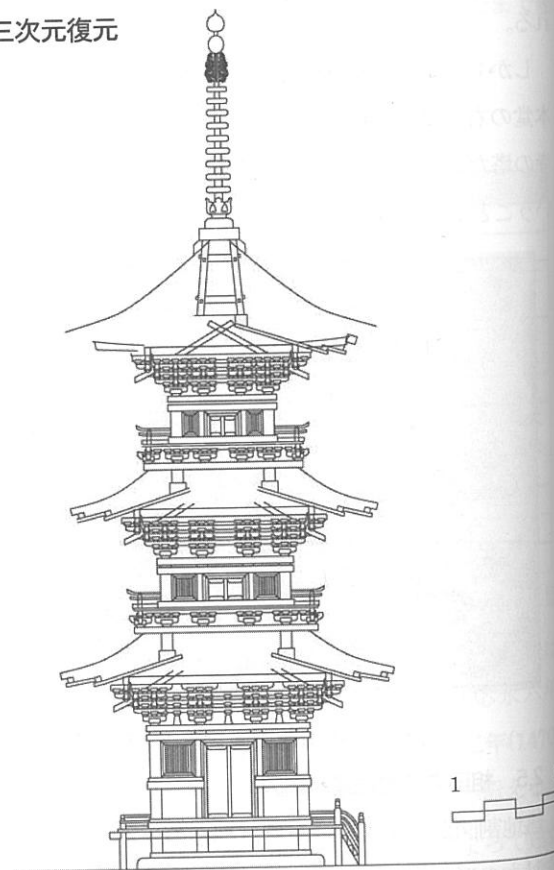


図5 相国寺三重塔建地割図



図3 (宝永)花洛細見図



図4 都名所図会

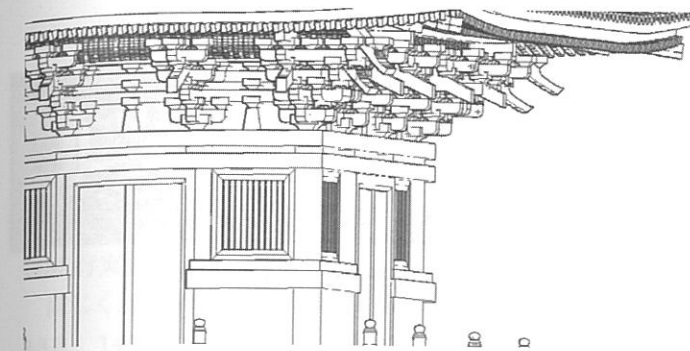


図6 初層パース

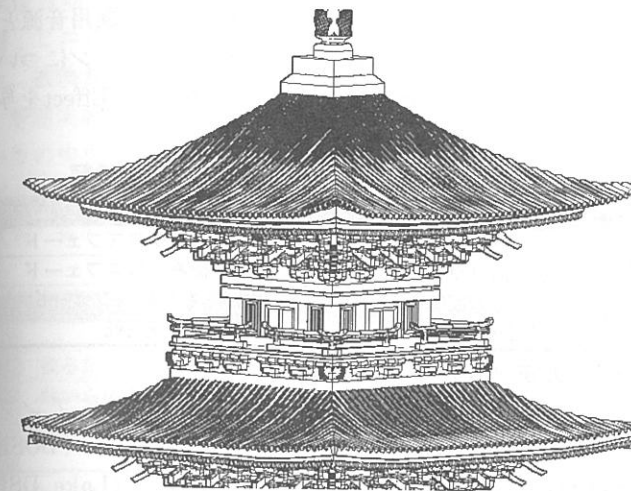


図7 最上層パース

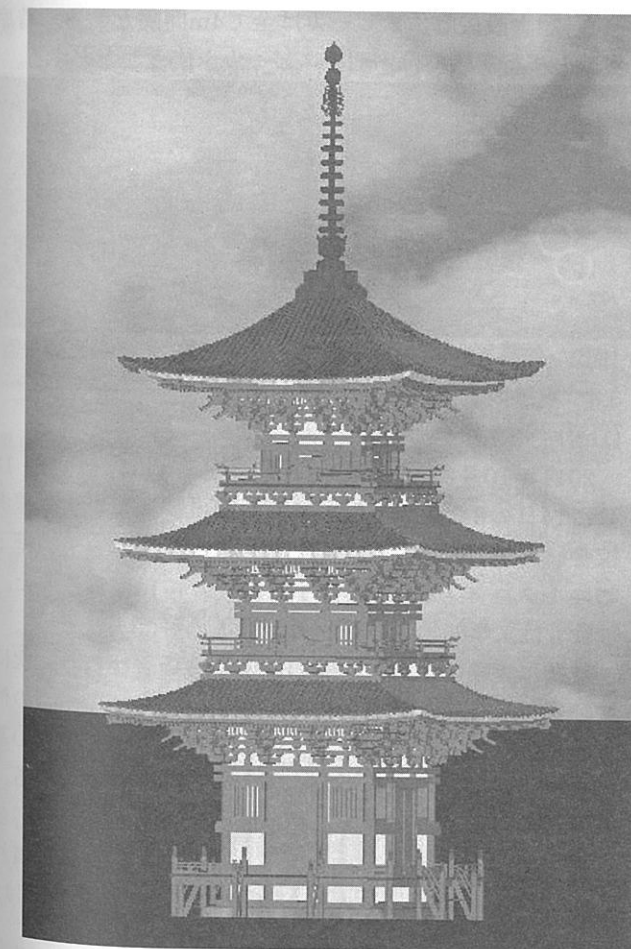


図8 三次元全体パース

#### 6. 匠明、建仁寺派家伝書と相国寺三重塔の比較

相国寺三重塔は通減率や軒反りが匠明、建仁寺派家伝書とほとんど変わらなく、再建と言われているが、その際にいずれかを参考にした可能性が考えられる。

表6 相国寺三重塔  
通減率と柱太さ(単位:尺)

| 層 | 通減率    | 柱太さ  |
|---|--------|------|
| 一 | 1.0    | 1.15 |
| 二 | 0.8125 | 1.15 |
| 三 | 0.625  | 1.15 |

ただ、匠明では柱の太さが基準となっているが、相国寺三重塔では柱太さが三層ともに同じである

ため、木割そのものを採用してはいない。

表7 『匠明』柱太さ

| 層 | 柱太さ  |
|---|------|
| 一 | 1.28 |
| 二 | 1.12 |
| 三 | 1.12 |

#### 7.まとめ

近世の禅宗伽藍において塔は重要視されていなかったが、相国寺は例外で、宗教的な意味とは別に政治的な理由で塔にこだわった。

承応期に建てられた三重塔は枝割や通減率からは近世的なものであり、『匠明』や『建仁寺派家伝書』とあまり差がないことがわかった。一方で、正面性のない建物であったことから中世的な傾向も持っていることもわかった。この三重塔は応永六年(1399)に建てられた七重塔の再建だとされているが、近世的な傾向を示していることから、再建といえども、変更があったのではないかと考えられる。

また、塔にこだわった相国寺においても、塔の形態や細部意匠は他の塔と変わらぬものであった。相国寺七重塔は院政勢力の象徴である法勝寺八角九重塔を越えるように建設され権威を示した。しかし、この時代の相国寺は幾度の焼失や鹿苑僧祿の廃止を経て、創建当時の繁栄と栄光はなくなり、塔を建てる意味も応永期のものとは変わっていた。近世的で和様で且つ正統派の塔が建った理由として、寺として金銭的に余裕がなかったことも考えられるが、近世における相国寺のあり方の象徴として建てられた可能性が大きいだろう。この塔の建立が相国寺の新たな出発の契機となったのではないか。

#### 参考文献

- 1) 相国寺ホームページ <http://www.shokoku-ji.jp/top.php>
- 2) 国立歴史民俗博物館編集『古図にみる日本の建築』1989
- 3) 伊藤実昭著、相国寺教化活動委員会編『近世の相国寺』2008
- 4) 国際日本文化研究センター 都名所図会データベース [http://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/kyoto/page7/km\\_01\\_003.html](http://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/kyoto/page7/km_01_003.html)
- 5) 1966年論文「足利義満の相国寺建立について」今枝愛真
- 6) 国立歴史民俗博物館編『高きを求めた昔の日本人: 巨大建造物をさぐる』2001
- 7) 浜島正士編『日本の美術 第158号 塔の建築』1979
- 8) 浜島正士著『日本仏塔集成』2001
- 9) 近藤豊著『古建築の細部意匠』1991
- 10) 北尾嘉弘著『社寺建築の軒反りの研究』1999
- 11) 2001年論文「相国寺七重塔 安置仏と供養会の空間からみた建立の意義」富島義之
- 12) 1996年論文「CADによる日本伝統建築の軒反り曲線設計法」麓和善、鈴木光雄、河田克博、内藤昌
- 13) 1999年論文「「CAD軒反り式」からみた文化財社寺軒反り曲線の特性」麓和善、鈴木光雄、河田克博、小川英明、内藤昌